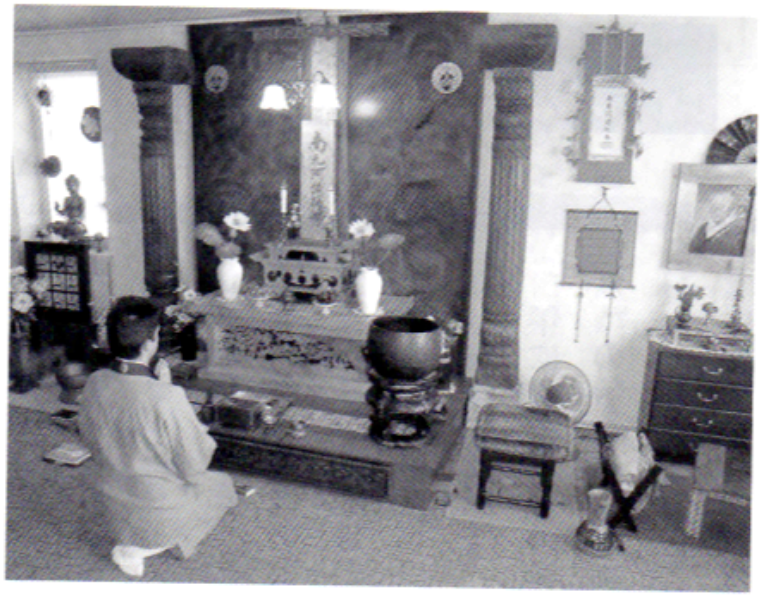
ポーランドへ伝わった浄土真宗



サンガ浄土真宗

ヨーロッパの中央に位置するポーランドへは、日本との直行便がないため、周辺の国で乗り継ぎし日本から約十八時間かかる。首都ワルシャワの国際空港から車で約十五分のワルシャワ市中心部に、浄土真宗の「サンガ浄土真宗」というお寺がある。

ポーランドの人口は、約四〇〇〇万人。人口のおよそ九五パーセントは、キリスト教（主にローマカトリック）を信仰する。非カトリックの宗教人口は百万人をわずかに超えるのみだという。そのうち、正確な統計はないが約十万人が自ら仏教徒と名乗るか、あるいは積極的に仏教に関心を持つ人々であるが、そのほとんどは、チベット仏教、禅宗系（韓国禅、曹洞禅）の信徒であり、浄土真宗の念仏者は、ごくわずかである。

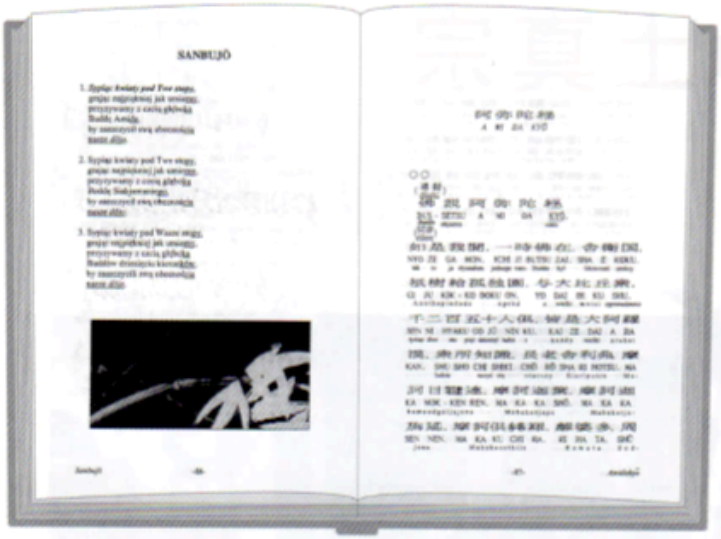
「ポーランドにお寺」と聞いて驚かれる方も多いと思うが、カトリックの国で、非カトリックの宗教が宗教法人を取得できたことは、異例のことであった。様々な困難があったが、一九九六年三月、ポーランド共和国内務省宗教科より正式に宗教法

人として登録され、ポーランドの地に念仏道場「サンガ浄土真宗」（以下、「サンガ」）が設立された。

「サンガ」の主管（代表）は、ポーランド人の妙珠アグネス・エンジェエスカさんである。妙珠アグネスさんは、一九四二年にワルシャワに生まれ、来日するまでポーランドで神経病理学の医師として病院・研究所に勤務、旧ソ連やアメリカの病院にも派遣されていた。

一九八三年、国際仏教文化協会の要請を受けたベルギーのペール氏がポーランドを訪問。その時たまたま勤行（おつとめ）の場を提供したのが、妙珠アグネスさんであった。一九八八年にベルリンで帰敬式（おかみそり）を受式し、浄土真宗に帰依するようになった。その後、予てより面識があった光輪寺（横浜市）の住職・村石恵照師と一九八九年に結婚し、一九九二年には西本願寺にて得度し僧籍を取得、日本とポーランドを行き来する生活が始まった。

現在の「サンガ」のメンバーは約三十人。すべてポーランド人で日系人はいない。メンバーの年齢層は三十代が中心で、若い信者によって支えられ、運営は会費制で行われている。二〇〇四年には、ポーランドにおいて、大谷光淳新門様（西本願寺住職後継者）により、帰敬式が行われ、メンバーの多くが受式した。



妙珠アグネスさんは、「ヨーロッパで仏教を信仰する人は、ヨーロッパの文化と伝統のなかで随分と居心地の悪い立場におかれる」と話す。

年に数人の「サンガ」のメンバーが来日し、ポーランドでは体験できない日本

の仏教や伝統を学ぶなどの交流が行われている。

「サンガ」では、特に勤行に力を入れていて、「正信偈」「阿弥陀経」「讃佛偈」などは日本と同じように唱えているが、「サンガ」独自の勤行スタイルも生まれている。勤行はおよそ二時間、メンバーは正座でつとめる。

「サンガ」が制作した「勤行聖典」を見ると、ローマ字とポーランド語が併記され、また漢文がポーランド語に意訳されていて、おつとめの一部として拝読されている。また、ポーランド人が作曲した「念仏讃歌」がある。メロディを誌面でお伝えできないのは残念だが、ポーランドの念仏者のお念仏に対する思いを表現したとてもすばらしい歌である。

浄土真宗の教えが日本からポーランドへと伝わり、ポーランドの文化、習俗と相まった形で「おつとめ」などが創意工夫されることにより、よりポーランドの人々に根づいている様子がうかがえる。このような地道な活動がお念仏の輪をひろげ、「ポーランドの浄土真宗」として育っているのである。